

●精神科医の服部祥子さんは、わたしたちの人生というのは、一層の船が海に漕ぎ出していくようなものであり、「思春期にはまだ完成していない船を浮かべては港に戻して徐々に完成させるように、時にいざとなれば助けとなるその様な港となる存在、場所が大切だ」と述べておられます。

思えば、それは思春期だけに限ったことではなく、大人でも同じではないでしょうか。私達がより良くこの世で生きていくため、人生の海の嵐を渡りゆくためには「魂の港」と言うべき場所が必要なのです。

イエス様は「疲れたもの重荷を負うものはだれでもわたしのもとに来なさい、休ませてあげよう」と言われました。「苦しみを無くしてあげましょう」ではなく、「休ませてあげよう」と言われたこの言葉は、イエス様というお方が海を旅する者たちの港のような存在であることを教えています。

●今から約2000年前の初代教会は「家の教会」とも呼ばれ、シンプルな賛美や聖書朗読と語り合い、そして食事(愛餐)が礼拝の中心となっていました。毎週日曜日に共に食卓につき、そこで温かく迎えてくださるイエス様を人々は思い起こしていたということが、今日の聖書箇所からも伺えます。

●今日のヨハネによる福音書21章はイエス様が復活された後、ティベリアス湖(ガリラヤ湖)で弟子たちに姿を現されたという内容です。このお話の、前半部分は、私たちの日常生活、そして後半部分は、イエス様を中心とした食卓、つまり聖餐式(礼拝)を思わせる姿が描かれています。

ガリラヤ湖で、一晩働いても全く魚が捕れなかった弟子たちのような労苦が私たちの日常生活にもあり、また、イエス様の声に従って網をうち大量の魚が与えられたという出来事のように、神様の言葉に従い歩む時にたくさんの恵みを与えられることがあります。

この世の歩みに疲れた弟子たちを労るように、炭火を起し、食卓に招かれるイエス様の姿は、日曜日ごとの礼拝で、私たちを温かく迎え、その労をねぎらい、恵みを喜ぶイエス様の姿です。

この復活のイエスさまは、時を超えて全ての教会とその礼拝に生きておられ、一人一人を招き続けて下さっているのだと、今日の話は伝えているのです。

●近年、全国で開かれている「子ども食堂」は今や9000件以上になっており、それは経済的に困窮した子どもたちだけでなく、大人も共に集う「居場所」になってきているようです。生きづらい世の中であって、皆温かく迎えられる場所を求めているのです。私たちの伊丹教会もこの地域であって、イエス様の変わらぬ愛と温もりを感じられる教会となっていくことができるよう、新年度もまた共に祈りつつ励んでまいりましょう。